

かしこき御かげ

行啓ちかくなるまゝに、學校の内外さまぐしつらひなしたり。わが音楽學校ありて、始めてのいでましなり。いかで其日の空よく晴れよ。風もなぎよなど祈る。今日ともなりにけり。まだきおきいでぬれば、雨の音しめやかなり。あやにくの天氣よ、さらばちまたの塵しづむるほどに降りて、とく晴れよなど思ひつゝゆく。忍ぶが岡は花の梢すこし盛すぎたれど、猶雨にえんなる色をそへたり。

年頃なれし所なれど、今日は又更になつかしき心地して、そこゝ見ありく。奏樂堂の中ほどに、屏風二双ひきめぐらして、御坐しつらひたり。其もとに赤き白きいろくの花多く飾りたるが、今日の嬉しさをやさしく、吹き入る風にゆらめきあへり。やがて御前に奏せらるべきピアノよオリンよ、心あらばおのが胸にみちたる喜びをうちいでて、嬉しき音をも打そへよ。

いでまはしは二時の頃なり。御車ほどもなうといふに、人々御むかへす。門の櫻かぜにちるは、嬉しさに舞ふらんと見えて、落ちては庭に玉しきたるやうなり。いでましの大みよそひいと輕きにも、重きみいつのほどいよく仰がれてたふとし。供奉の人々のうすきこきこゝろくの衣の色、みる目もいとあやなり。花の香かをりみちて白き窓かけおほひし室にしばしいこはせ給ふ。

かしこきみかげ今こそ迎ふれの唱歌にて、御坐にいでさせ給ひぬ。

きこしめすべき樂は九番あり。其中の一つに我も數へられたる、世に生れいでしかひはありけりと思ふ物から、あまりに拙きわざこそいとも苦しけれ。いかなりけん。いと御前けぢかきに、あやなくも闇路にまどふ心地のみしたるよ。つきく奏してもゆくに。そともは雨しめやかに、室のうちは花の香しめりて、ソナタ、コンセルトなどの大いなるハルモニ―波だちたり。そびらに羽おへる小き神そここゝに舞ふらんと覺えて、心のうちいひしらずのどやかになりぬ。げに心に憂へあらん人も、只今はまぎれぬべき御前のさまなり。

還御の頃、雨は晴れぬ。御みおくりしはてゝ、人々うれしき包みあへず、御座のあたり、御便殿のあたり、そゞろにさゞめきありく間を、しばし靜なる室に入りて、ふところ放たぬなき母の寫眞とりいでつ。あはれ今日のこの嬉しさを、まのあたりわかたんすべなきこそ悲しけれど、つくぐと思ひいりたる窓のものと櫂の梢、風にゆるめきて露はらくとこぼれぬ。

御座のあたりに飾りしにほひよき花一束、けふの紀念にとこひ得つ。此花は限あればやがて色あせぬべし。されど心々にあふれし今日の嬉しさよ。いつの世にか消ゆべきなど思ふほど、あたりほのくらくなりぬ。夕べの歌うたひつれて近き森に急ぐ鳥の聲も、楽しげにきゝなされて家路に向ひぬ。(明治三十二年四月廿一日)

底本：佐々木信綱編「竹柏園集第一編」

明治三十四(1901)年二月十日発行

入力：小林 徹

公開：令和四(2022)年四月二十九日

最終更新日：令和四(2022)年四月三十日

橘糸重【[散文作品集](#)】に戻る。